

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 25 日現在

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22592598

研究課題名（和文） 統合失調症とその家族への心理教育による相乗効果の研究

研究課題名（英文） Study of synergy psychology education for their families and schizophrenia

研究代表者

内山 繁樹 (UCHIYAMA SHIGEKI)

横浜市立大学・医学部・准教授

研究者番号：80369404

研究成果の概要（和文）：

EBP プログラムである IMR (Illness Management and Recovery : 疾病自己管理とリカバリー) と FPE (Family Psycho Education : 家族心理教育) を並行して実施することで、家族間の負担感の軽減や自己効力感など相補的・相乗的な効果を実証的に示すことを目的とし、当事者とその家族を対象に介入を行った。リカバリーゴールの達成に向けて前向きな行動変容が見られることで QOL の改善傾向や再発予防として示唆された。また、家族はエネルギーの使い方が減少し、体験の共感や苦労の分かち合いから心理的サポートの実感が得られていた。

研究成果の概要（英文）：

It is intended to show empirically the effect complementary, synergistic, such as self-efficacy and reduction of burden among family members, we intervene in their families and parties. Is carried out in parallel: IMR and FPE is the EBP programs. It was suggested as relapse prevention and improvement trend of QOL by positive behavioral change can be seen towards the achievement of the recovery goal. In addition, use of energy is reduced and the feeling of psychological support has been obtained from sharing the suffering and sympathy of family experience.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：医歯薬

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：心理教育 リカバリー 統合失調症 家族心理教育

1. 研究開始当初の背景

IMRは、リカバリーの理念に基づき精神障害

をもつ人が、自分にとって意味ある目標を設定した上で、その達成を目指しながら疾病自

己管理の知識とスキルを獲得するための、パッケージ化された心理教育のプログラムである。また、IMRは構造化されたリカバリーの臨床サービスモデルであり、先行研究で有効性が実証されている精神疾患の4つの治療戦略(心理教育-認知行動的技法-再発予防-対処技能訓練)を統合したものである(藤田、久野、加藤他, 2008; Mueser, 2007)。また実践者は必ずしも医師である必要はなく、コメディカルスタッフが中心に施行していくことができる。しかし、IMRはあくまで本人向けのプログラムであり、家族を対象にはしていない。一方、我が国は米国に比べ精神障害者の家族との同居率が高く、家族の感情表出研究(EE)は、世界各国で追試研究が行われすでに確立したものになってきているから、FPEは重要である。FPEは、前述のリカバリーの概念に基づくプログラムであり、精神障害者を抱える家族が、患者への対応に日々苦慮していること、自己を責めることの早期解放、精神障害者もしくはその家族というステイグマなど家族が経験する負担感を軽減しストレスを緩和しようとするニーズに対応する社会的貢献にもつながる。そこで本人向けのIMRを行うと家族が不在になりやすく、家族向けのFPEを行うと本人が不在になりやすいことに着目した。当事者とその家族に行う双方のプログラムを組み合わさることで、より良い効果が期待できるという仮説を立てた。

2. 研究の目的

エビデンスに基づいたプログラム IMR (Illness Management and Recovery : 疾病自己管理とリカバリー) と FPE (Family Psycho Education : 家族心理教育) を同時期に実施することで、各々のリカバリーに向けての相補的・相乗的な効果を検討する。

3. 研究の方法

(1) 対象 : 各回外来通院をしている20歳以上の統合失調症の患者数名から10名とその

ご家族。(2) 具体的実施方法および分担者の役割 : ①プログラム形式 : 講義形式の教育プログラムおよびグループワーク ②頻度・回数 : IMRは1時間/1回/W、計25回。FPEは2時間/1回/W、計8回。③実践場所 : 精神科外来デイルーム ④評価スケール : (ア) IMR実施前後に、機能の全体的評価(GAF)と簡易精神症状評価尺度

(BPRS), SF-36健康調査票(SF-36), 生活満足度スケール(LSS), 地域生活に対する自己効力感尺度(SECL), 利用者満足度調査票(CSQ-8)を用いた。又プログラムの感想、リカバリーゴールの振り返りシートを開始前と終了時に測定。(イ) FPEは、家族機能評価(FACESIII)尺度、自尊感情尺度、精神的・身体的健康状態、自己効力感、プログラムの感想を開始前と終了時に2回測定。

(ウ) 各回実施の当事者・家族による感想の質的分析およびアウトカムスケールの分析。症例検討にて実効性、有効性のフィデリティー検討。

尚、本研究は本学の研究倫理委員会の承認を受け、実施にあたり対象者に研究の主旨を十分説明し書面による同意を得た上で行われた。

4. 研究成果

(1) IMR の評価

リカバリーゴールを「朝10時には起床し着替える」(A氏), 「自分でできることは自分で取り組む」(B氏), 「他人とうまく交流する」(C氏)と設定した。A氏は作業所に通うために毎日洋服に着替え外出する機会が増加し, B氏は家族とぶつからなくなり, C氏は周囲に対する考え方が変容し感情表現を踏み止まれるようになった。評価尺度では GAF (+9~+13), BPRF (-2~-13) および SECL (日常生活と対人関係において), CSQ-8 (平均点 : 25.7点) に改善傾向が見られた。インタビ

ユー調査ではリカバリーゴール設定とそのゴールに向けたスモールステップの実践が大きな動機付けにつながったと強調された。各症例ともプログラムに対する能動的な取り組みとリカバリーゴールの達成に向けた前向きな行動変容がみられた。参加者の満足度も高いプログラムであることが示唆された。

(2) IMR終了後の効果の持続性について
同研究チームでQOLや自己効力感の改善、2年経過後ではGAF,PAM13-MH,LSSの改善が見られた。さらに追跡調査でIMRの効果の持続性として8つのカテゴリー【自信を持つ】【ストレス予防と対処の工夫】【続く症状や問題への対処と工夫】【人と関わる重要性を実感】【大切にしている居場所】【再発予防の取り組み】【希望や願いをもつ】【目標に向かう意欲と努力】が抽出された。これらのカテゴリーは、その人らしく自ら望む生き方を追究するリカバリー理念と一致するものであり、具体的な目標をたてながら前に進む努力により、将来への希望や願いを持ち、再発予防への取り組みを続けていることが明らかになり、終了後も継続されていたと考えられる。IMRの効果の持続性として自己効力感の改善、ソーシャルサポートの改善、希望や願いの増大が得られ、リカバリーゴールに向けての主体的な進歩が得られた。

(3) 当事者家族へのFPE評価について
当事者家族へのFPEについては、7名の家族にプログラムを実践し、生活困難度、家族機能、自尊感情、精神的身体的健康状態の評価と半構造化面接を行った。生活困難度では実施後に当事者に対するエネルギーの使い方が減少(p<.01)した。家族は、周囲の支援を求められにくく孤立化しやすいが、体験の共感や苦勞の分かち合いを通して役に立つ情報や対処の共有化、家族同士のねぎらいや心理的サポ

ートの実感が得られていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①平安良雄, 加藤大慈, 佐伯隆史, 内山繁樹, 佐藤直子, 藤田英美: IMR 疾病管理とリカバリーによる地域生活支援, 精神看護, 14(4), p97-103, 2011. (査読有)

②内山繁樹, 加藤大慈, 藤田英美, 上原久美, 武井寛道, 佐伯隆史, 平安良雄: 通院中の統合失調症患者への疾病管理とリカバリー (Illness Management and Recovery: IMR) プログラムの実践, 横浜看護学雑誌, p39-44, 2010. (査読有)

[学会発表] (計5件)

①内山繁樹, 加藤大慈, 藤田英美: 疾病管理とリカバリー (Illness Management and Recovery: IMR) の持続性に関する質的検討, 神奈川県精神医学会, 2013. 2. 16, A P 横浜駅西口 (神奈川県).

②内山繁樹, 加藤大慈, 藤田英美: 看護実践としての心理教育～Illness Management and Recovery (IMR: 疾病管理とリカバリー) ～, 第37回日本精神科看護学術集会, 2012. 6. 1～2, 神戸国際会議場 (兵庫県).

③加藤大慈, 藤田英美, 内山繁樹, 渡辺厚彦, 佐伯隆史, 平安良雄: Illness Management and Recovery (IMR: 疾病管理とリカバリー) の効果の持続性の検討, 日本精神障害者リハビリテーション学会第19回京都大会, 2011. 11. 16～17, 仏教大学 (京都府).

④内山繁樹, 加藤大慈, 藤田英美, 上原久美, 武井寛道, 佐伯隆史, 平安良雄: 通院中の統合失調症患者への疾病管理とリカバリー (Illness Management and Recovery; IMR) プログラム実践の検討, 第30回日本看護科学学会学術集会, 2010. 12. 2～3, 札幌コンベンションセンター (北海道).

⑤藤田英美, 加藤大慈, 内山繁樹, 渡辺厚

彦, 上原久美, 平安良雄: 精神科外来患者を対象とした疾病管理とリカバリー(IMR)プログラムの効果, 第106回日本精神神経学会総会, 2010.5.12~13, 広島国際会議場(広島県).

[図書](計2件)

- ①瀧川薫編, 内山繁樹他: 看護系標準教科書 精神看護学 改訂版, 株式会社オーム社, p 139-154. 2013.9 発刊予定.
- ②内山繁樹: やどかりブックレット・障害者からのメッセージ 20 ひとりぼっちなあなたへ 仲間・出会い・未来, やどかり出版, P71, 2011.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内山 繁樹 (UCHIYAMA SHIGEKI)
横浜市立大学・医学部・准教授
研究者番号: 80369404

(2) 研究分担者

若狭 紅子 (WAKASA BENIKO)
横浜市立大学・医学部・教授
研究者番号: 10279705

(3) 連携研究者・研究分担者

塚田 尚子 (THUKADA NAOKO)
横浜市立大学・医学部・助教
研究者番号: 50589835
平成22年 連携研究者
(平成23年度より連携研究者から研究
分担者に変更)

(4) 研究分担者

池邊 敏子 (IKEBE TOSHIKO)
横浜市立大学・医学部・教授
研究者番号: 70184447

(平成23年度で分担者としての期間終了)